



Title	地理学者の夢と現実
Author(s)	竹内, 啓一
Citation	一橋論叢, 95(3): 311-326
Issue Date	1986-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/12795
Right	

地理学者の夢と現実

一

ひとりの人間がある職業をえらぶのには、それなりの内部のおよび外部の契機があったであろう。そして、それなりの展望、期待をもったであろう。何十年にわたるその職業における実践、広義の創造活動を展開する、彼または彼女をしてそのような営為にかりたてたものも、そこにはあつたはずである。何十年か後、社会的には第一線から退いた段階で、彼または彼女は、自らの軌跡について、何らかの反省あるいは考察をするにちがいない。自らが生き、仕事をしてきた環境⁽¹⁾に対して、一定の評価を与えているにちがいない。

これらは個人的なことである。そのような主観的判断

は科学の対象にはならない、そして、そのような個人の内面に関心をもつのは知的羞恥心の欠如であるといえるかもしれない。しかし、科学者であれ芸術家であれ、人間のあいだのコミュニケーション、そしてそれを通じての理解というものは、常にそのような内面の理解をともなっているのではないだろうか。

日本の地理学界、それは極めて限られた人間集団である。地理学界だけのことではないが、そこでは研究成果という公にされた創造活動による交流の場としての性格と、人間集団という性格とがまったく別のものとされている。すくなくとも、公的には、後者の性格は無視される。実際には、意識するしないにかかわらず、それを構成する各個人は、両者を一体のものと受けとめて行動し、

竹内啓一

個人間のコミュニケーションを成立させているのである。本稿で試みるのは、公的には無視されかねない側面に光をあてて、日本の地理学者がおこなった営為を理解することである。

(1) ミロド「環境」というのは Butimer, A. *Society and Milieu in the French Geographic Tradition* Rand McNally 1971 で彼女が言う milieu の意味においてであって、制度、人間関係そして仕事を進めるのにあたっての社会的条件、それらすべてをふくむものである。

二

一九八五年一〇月二〇日、岩手大学で開催された日本地理学会秋季大会の折、地理思想史研究グループの研究集会において、私は、「日本の Senior Geographers の発言」と題して、約三時間のものに編集したビデオ作品を紹介した。これは二人の日本の長老地理学者に登場していただいて、地理学を志すようになった契機、学生時代および研究者としての修練時代の環境、およびそこで考えたこと、そして何人かの方には地理学者としての第二次大戦中の体験を語っていただいたものである。

編集の素材になったテープは、まず過去二年余の間、日本地理学会内の上記地理思想史研究グループの研究集会に來られた長老地理学者の発言を録画したものである。これには、二人のすでに故人になった方がふくまれる。

次に、私が長老地理学者の発言を記録すべくカメラをかついでお宅その他の場所に向いて録画したテープがいくつかある。第三に、数からは最も多いのは、ある出版社の企画で、正井泰夫氏（以下、本稿では敬称をすべてはぶかせていただく）と私とが編者兼インタヴューアーとなつて、現在の日本の地理学について、今後の地理学研究のあり方についての対談をした折に、地理思想史研究グループが、いわば便乗して、御本人の了承を得て録画したものである。この企画の対象になった方のうち、一人をのぞいて一五人の方がビデオ録画を承知して下さった。

録画にさいしては、このビデオテープを学会の財産にし、学問史あるいは学界史の研究用の資料として公開すること、したがって、答えたくない質問には答えて下さらなくても結構である旨念をおした。何人かの方は、あらかじめ質問してほしくない事項について希望を述べ

られたし、対談の途中でオフレコにしてほしい旨申し出られて、録画を中断した場合もある。このようにして記録されたテープは、現在のところ四〇数時間分になっているので、さる十月に学会の研究集会で紹介したのは、このうち、特定のテーマ、特定の時代について、私なりの編集をしたものであって、編集には私の立場、恣意性が介在しているであろう。オリジナルなテープよりも資料としての価値はすくないが、おなじ地理学の営みをしている視聴者に、人間集団としての日本の地理学を内面から理解するための契機、そしてディアローグ(対話³)という形式のコミュニケーションの環をひろげていくための触媒を、私なりに提供しようとしたものである。

この仕事は、明らかに、バッテリーとヘーエルストラントが国際的な規模ですすめている作業に触発されたものである。バッテリーから最初にこの企画についての話をきき、協力を求められたのは一九七七年九月、エディンバラでの国際科学史、科学哲学会議の地理思想史部会においてであった。後になって彼女が書いたものの中では、彼女は自伝および対話について認識論上の検討をおこなっているが、エディンバラでの彼女の議論はも

っと直截なものであった。すなわち、地理学説史、あるいは地理学の諸学派の歴史は、書かれたもの、文字で残された記録からだけでは、その研究がしばしば非常に困難である。長老地理学者が知ってはいるが、教育その他の実務に忙殺されて書くことができなかったこと、彼らが、さまざまな事件をどのように経験したかということを通じて、地理学の営みの歩みを内面から理解するすべにしなければならないというのが彼女の提案の趣旨であった。なお、地理学者の営為という場合の地理学者とは、アカデミーの地理学者に限られるものでなく、プランニング、ジャーナリズムなどに携わって、そこで取り組んだ問題が空間に関わる人たちすべてを含むことは当然のこととされていた。これは、そこに集まっていた地理思想史研究委員会⁵が、地理学者についての書誌学的伝記的研究を編集するさいに持たれた共通の理解でもあった。

一九七七年のエディンバラにおいても、そして一九七九年、私が科研費による地理思想史研究のためのグループ(研究代表者 水津一朗)で日本の長老地理学者のヴィデオ・ポートレート⁶の蒐集を提案したときにも、さら

に一九八〇年八月、ヘーエルストラントとバッテリー
が京都での第二十四回国際地理学会議地理思想史研究委
員会の集会にいくつかのヴィデオテープを持って来て紹
介した折にも、このような試みに対する疑義、問題点が
共通して出された。ヴィデオというメディアにおいては
演技がはいるのではないか、自伝というものには、自己
正当化、事実の隠蔽がともなうのではないか、というこ
とは、誰もが問題にするところであるが、この点につい
ては、資料は常に批判をとらなければならぬとい
う一般原則のなかで、ヴィデオというメディアについて
新たに考えようとしか言うことができない。日本の何人
かの同僚は、ブライヴァシーの保護という観点から問題
を提起した。彼らが心配したのは、インタヴューという
形式が、いわば信条告白を強制することになりはしない
かという点であったが、もうひとつ問題になるのは、発
言者に、発言内容について責任をとってもらうのは当然
としても、発言のなかで言及されている関係者のブライ
ヴァシーである。過去においても、長老地理学者の発言
をテープ・リコーダーに録音する作業がなされたが、第
三者(?)への影響をおもんばかって、結局公開されな

いままになつてゐる。逆説的に言えば、発言内容に責任
をとってもらう以上、演技や事実の隠蔽が、とくに日本
では要請されるのである。

バッテリーは、どちらかというところ、学問史や学説史
研究のための資料蒐集よりも、対話そのものをもつ可能
性、すなわちアウトサイダーとインサイダーとの対話を
通じての相互浸透的な理解の可能性、そしてメディアと
メッセージとの関係の探求を志向してゐた。学問形成の
主体と環境との相互作用を内面的に理解するための資料
蒐集なのであることはよく理解できたのであるが、日本
でそれを実現するには、やはりかなりの準備が必要であ
つた。一九八〇年に水津一朗からひきついで、ほぼ同
じメンバーによる科研費総合研究Aの研究代表者が私が
四年間つとめ、現在それは野沢秀樹を研究代表者として
継承されているが、そこでの何回かの討論は、日本の地
理学についての展望をもつのに大変参考になつた。また
一九八二年度から私が発起人代表になつて、日本地理学
会内の研究グループのひとつとして、地理思想史研究グ
ループが発足した。何回かの研究集会に長老地理学者に
もおいでいただき、まずはグループ討論の録画をはじめ

た。一九八五年度になって個人インタビューの録面をはじめたのは、私にすこし時間的余裕ができたという理由のほかに、対話の録面ということの意味について、多少なりとも考えがまとまってきたことによる。ただ、今回編集したテープのオリジナルは、前述のように出版社の企画による自伝的内容をききだすインタビューの録面が主になっていたので、岩手大学で紹介したものは、資料紹介的な性格をもつことになったのである。本稿では、以下、この編集された作品を素材にしながら、日本における地理学の歩みのいくつかの側面に対する理解を、今回は、書かれた言葉というランガージュを通して試みることにしたい。

(2) 本書は、『地理学を学ぶ——Interview with Senior Geographers』の書名で、古今書院から一九八六年春に出版される予定である。

(3) ディアブローグを、語源的に、「語ること」(レゲスタイ)「を通じて」(ディア)のロシニケーションであると考えばそれは二人の対談に限られず、グループディスカッションもよくまわれることになる。

(4) Buttimer, A. and Hagerstrand, T. *Invitation to Dialogue* DIA Paper No. 1 University of Lund 1980, But-

timer, A. *The Practice of Geography* Longmann 1983

(5) Commission for the History of Geographical Thought は一九六八年以来、国際地理学連合 (IGU) の中において活動してきたが、同時に国際科学史・科学哲学学会にも属して、そこにおける研究委員会をまなしてきた。一九八〇年までの委員長は Ph. Pinchomel (パリ第一大学) であり一九八〇年 Working Group for the History of Geographical Thought に名前を変えてからの委員長は D. Hooson (カリフォルニア大・サンクレール) である。

(6) *Geographers, Biobibliographical Studies* は、第一巻が一九七七年 Marsell から出版され、現在までに九巻が出版されている。編集は T. W. Freeman がおこなっている。現在までにとりあげられた日本の地理学者は、山崎直方、小川琢治、志賀重昂の三人である。

(7) Buttimer, A. and Hagerstrand, T. op. cit. 1980 第 4 頁
Buttimer, A. Reason, Rationality and Human Creativity *Geografiska Annaler* 61B—1 1979, *Musing on Helicon: Root Metaphors in Geography* *Geografiska Annaler* 64B—2 1982

三

その発言を編集の対象にした二二名の地理学者は、いずれも収録時に七一歳以上の方である。首都圏在住者が

このうち一五名を占めることから明らかなように、この人選はかなり便宜的であり、今後、もっと多様な経歴、活動分野の方たちを網羅するようインタビューあるいは対話の対象を増やしていかなければならない、その過程でのいわば中間報告である。日本における地理学の実践に何らかの意味で積極的にたずさわってきたと考えられるこれらの方達は皆、最終的には大学に一〇年以上勤務されている。大学以外の場所、かなり長い期間実質的な仕事をした後、大学に勤められたのは上野福男、西水孜郎⁽⁸⁾、矢嶋仁吉、山口弥一郎の四名であるが、女学校、高校に停年まで勤められた山口を別にすれば、いずれも国家公務員であった。国家機関と大学とが一体となって日本の地理学をになってきたために、日本のアカデミー地理学は権威主義的そして「官学」的性格を持つことになり、真の異端は育ちにくかったと言えるかもしれない。地理学者としての形成についてみると、東京高等師範学校を経て東京文理科大学というのが七名、東京帝国大学が七名、京都帝国大学が五名、私立大学（日本大学）が一名、師範学校卒業後いわゆる文検（文部省尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教員免許検定試験）合格、

という経歴が二名である。この構成は一九四七年頃までの日本の地理学界のそれにほぼ対応している。

ここでまず第一に考察するのは、一九二〇年代後半から一九三〇年代において、日本ではどのような環境のもとで、一人の人間が地理学を専攻するようになり、さらに専門にするテーマを決めていったかという問題である。すなわち、地理学者の夢がどのようなにしてはぐくまれたかということである。この問題についての発言は、多少の美化や偽悪的な調子が入ることはあっても、おおむねフランクなものであると考えて良いであろう。一九二〇年代と言えばすでに京都帝国大学、東京帝国大学に地理学専攻課程が出来ていたし、一九二九年には東京文理科大学が創設されて地理学科が置かれているから、今回の発言者は、いずれも地理学の制度化⁽¹⁰⁾が完了した時期に地理学者としての形成をとげたことになる。

小学校あるいは師範学校在籍の頃から地理学を専攻しようと考えていたなどというのはむしろ例外で、ほとんどの場合大学に入る段階で、あるいは京大の場合には大学二年になる段階で地理学を選んでいく。その場合にも、

特定のテーマに関心をもったり、あるいは特定の教師の指導をおおぎたいという意向が先にあって地理学専攻を決定するという場合はむしろすくない。また地理学のなかでの専門テーマの決定は、卒業論文作成の段階で決まることが殆んどである。同時に、地理学者としての生涯を通じて、卒業論文を深め、発展させた場合が大部分であるから、この点で、地理学者としてのキャリアにとっての卒業論文の重要性は、すでに足利健亮が指摘した通りである。⁽¹⁾

京大の場合、歴史学や考古学を研究する目的で史学科に入学したのであり、この点では東京文理科大学の場合も、その前の東京高等師範にはいるさいに史学か地理学を専攻することを決心しているのであって、事情は同じである。東大の場合は地理学科が理学部に置かれていたのであるから、自然科学としての地理学を勉強するつもりで入学してくる。しかし結果的には、多くの人が人文地理学の研究者になった。在学中、とくに卒業論文を書く段階で専門を決める場合が多かったからである。

一九二〇年代、三〇年代を通じて、地理学に関して豊富な一流のスタッフを擁して充実したカリキュラムを提

供していたのは、東京高等師範学校と新たに作られた東京文理科大学であったと思われる。そこに学ぶ者が、そのことを誇りにしていたことも、上野福男をはじめ、何人かの発言から知ることができる。これに対して、東大と京大とでは講義の数もすくなく、地理学者としての形成は学生の自主的な勉強にゆだねられていたことはたしかかなようであるし、それぞれ固有の学風を築いていた発言者が、いわば独学と、先輩や他分野の専門家との討論で研究を深めていったのであった。しかし、東大、京大の卒業生が、口を揃えたように、当時の教室の自由な環境を強調し、それが教授のすぐれた指導力によるものとして語られているのは、他方では、山崎直方、辻村太郎、小川琢治、石橋五郎という当時の教授がもっていた絶大な権威を裏づけるものである。権威主義というものはマイナスの価値を持つものと考えられているから、そのことに直接言及することはないが、教授の指示は絶対的なものであったし、当時の教授が学生や若い研究者を心服させるだけの学問的内容をもっていたこともたしかである。たとえば、東大では進級論文の一つには必ず地形学をとりあげなければならなかったし、これが崩れて、

辻村太郎が批判されるようになるのは第二次大戦後のことである。京大では小牧実繁が小川琢治からプリンスとしての教育を、その指示にしたがって受けた様子と、村松繁樹の石橋五郎への傾倒ぶりが語られている。収録した録画からその間の事情を知ることができないが、一九三〇年代後半以降の京大地理出身者の大多数の地政学への傾斜は小牧の指導力なしには考えられなかったことであろう。⁽¹²⁾しかし、注目しておかなければならないのは、バッテリーの編纂した地理学者の自伝集をみて、博士論文のテーマをめぐって、指導教官の賛成が得られないというコンフリクトが欧米ではしばしばあったのに対して、日本では卒論——その役割は、Ph.D.論文や *diplôme d'études supérieures* に匹敵する——の選択にさいして、指導教官とそのようなコンフリクトがあったことは、発言のなかからは聞くことができなかった。むしろ、それほど明確な主張をもつことなく指導教官の同意したテーマを研究したと言えるのかも知れない。

もし学派(スクール)というものが、一人または複数の指導者を核とする人的結びつきと、その学問分野における一定の立場・主張によって成立しているとすれば、

第二次大戦前の日本の地理学界においては、第一の要素はたしかにあったが、第二の要素は権威に対する服従という形では存在しても、ひとつの学問体系をかたちづくるといふ形では存在しなかったのではなからうか。学問的立場・主張は、環境論的コンテキストか地域の個性を重視するという点では共通していたし、当事者によって意識されていたのも、学派ではなく、むしろ学閥であったようである。

第二次大戦前の日本において、中等学校レベルの地理教師の養成という点で——そしてそのなかの何人かは第二次大戦後、アカデミー地理学者として活躍することになるのであるが——地理学専攻課程を置いた私立大学の役割を無視することはできない。これについての証言は、また極めて不十分で、日本大学高等師範部地理歴史科(一九二六年設立)の卒業生籠瀬良明と、一九三四年以来、明治大学文科専門部史学科(一九三二年開設)、地理歴史科(一九三八年改組)で、いわば専任として教鞭をとった岡山俊雄(東大出身)の発言があるだけで、駒沢大学、法政大学高等師範部地理科、立命館大学などの事情について、当事者からの発言はない。しかし教師陣

の大部分をパートタイマー、現在の言葉で言えば客員乃至非常勤におおいでいたこれらの私立大学では、学生達¹⁴は、自分達は帝大、高師、女高師、文理大の先生方のサイド・ワークの対象になっているという劣等感をもつことが多かったのではないだろうか。しかし、岡山が指摘するように、私立大学においては、地理の中等教員の免状を与えるための条件として多くの種類の講義を開講しなければならなかったので、教育内容が一般に充実していたことはたしかであるし、講義内容をもとにして概説書が書かれるということもあった。ただ、そこで教える者にとって、そこが研究の場でもあるという、大学が本来もつべき教育と研究の統一という点からみれば、当時の私立大学は、こと地理学に関する限り、ほど遠い環境であったと言うことができよう。

文検制度が第二次大戦前の日本の地理学にとって果した重要な役割については、すでに中川浩一¹⁵の指摘がある。無試験で中等教員の地理の免状を出せる私立大学が充実してくるのにつれて、その比重は低下してきたといえ、文検制度は、中等学校、女学校および師範学校の地理の教師の重要な供給源になっていた。一九三〇年代におい

て受験者約数百、潜在的受験人口約三〇〇〇という数は、これだけの人が、大学卒業水準の地理学の勉強を志していたことを意味する。受験者にとってまず手がかりになるのは出題委員（公表されていた）の書いたものを読むことであつたために、主として出題委員の著書ではあつたが、文検受験志願者を市場として、多くの地理学の専門書が出版された。文検受験志願者を対象にした雑誌が成立し、そこには出題者のみでなく、かなり広範な地理学者によって、学会誌には掲載されないような意欲的な文章が掲載された。¹⁶今回ヴィデオに収録された発言者のなかでは、山口弥一郎が一九二七年に、浜田清吉が一九三一年に文検に合格している。浜田は一九三六年には、高等学校（旧制）の教員免許試験にも合格している。これらの人たちの地理学者としての形成は、当然のことながら大学卒業者とは非常にちがっている。勿論文検は、教員免状を与えるのであつて、研究者としての免状を与えるものではない。私自身、（旧制）中等学校、（新制）高等学校で、いずれも文検合格者の地理教師に習つたが、彼らは、いずれもすぐれた教師ではあつても研究者ではなかつた。多くの文検合格者がそつであつたらうし、ま

た、師範学校で教鞭をとっていても、新制大学に昇格するにさいしての資格審査は、大学を出ていない文検合格者に対しては、たとえ彼らが研究者を志向していても、非常にきびしかったようである。注目されるのは、研究を続けた人たちが、自分が独学であることを強く意識して良い指導者を求め、また大学研究者に負けないだけの仕事をしなければならぬと常に考えていたことである。山口弥一郎の場合、指導者は田中館愛橋と柳田国男であったし、浜田清吉の場合は、高等学校の教授資格を得ていた点で事情は大いに異なるが、辻村太郎であった。存命する文検合格者の方は非常にすくなくなっているし、すべての方の発言を聞いたわけではないので断定的なこととは言えないが、結果的には、文検合格を経て地理学者になった人のほうが、指導者の学恩を多くうけているのではないだろうか。研究テーマの決定にさいしても指導者の助言、指導が大きな意味をもったようである。

足利は地理学者の卒論のテーマの決定を「郷里決定論」にたとえ、生まれ育った場が強い影響を与えようという仮説を提示しているが、研究のフィールドとして郷里がとりあげられるのは、なによりも熟知している土地で

あり、また何かと調査の便がえられるという理由から、そのような事例が多いのは当然である。また郷里をフィールドにした場合、テーマがある程度限定されてくるのは、たとえば石川県出身の幸田清喜が、まず出作りをとりあげ、次いで繊維産業をとりあげ、これが日本における工業地理学のパイオニアに幸田を押し上げた例からも明らかである。郷里をとりあげなくても、たとえば山村の農家出身の上野福男が一貫して高地農業を研究し、国家のためよりも農民のための地理学をと主張している例からも明らかのように、生まれ育った環境が一人の地理学者の研究テーマを決定するのに大きな役割をはたした例はたしかにある。しかし、それとは無関係に、いわば修行時代の模索のなかでテーマを決定している場合も多くあるので、「郷里決定論」は、あまり一般的にはあてはまらない。

第二次大戦後も決して多いとはいえないが、それでも地理学方法論あるいは本質論に関する文章がかなり発表されるようになったのに対して、第二次大戦前には、そのような議論がさかんであったとは、発表されたものからは考えられない。しかし今回の発言をきいてみると、

戦前においても、当時の若い地理学者のあいだで、何が地理学的研究かという議論が非常にさかんであったことがわかる。隣接諸分野の文献を読み、また地理以外の専門家の門をも叩きながら、彼らは、地理学の意味、そして地理学の有効性について考え続けたのであった。結果として、多くが、環境論パラダイム、形態論パラダイムあるいは地域の個性の重視、すなわち例外主義パラダイムに執ることになったが、彼らは決して無反省ではなかったのである。第二次大戦後、新しい若い世代によって、地理学方法論あるいは本質論に関する議論が、熱気をおびて、しかしそのかなりの部分が不毛な成果しかうみださないで、なされたとき、不思議なことに、戦前の先輩たちの議論は殆んど継承されなかった。⁽¹⁸⁾書かれたものが少なかったということもわかるが、皆無ではなかったのである。

収録された発言から、当時の教室の主任あるいは指導者クラスの人以外に、戦前の若い研究者に大きな影響を与えた、今は亡き何人かの傑出した存在がうかび出ている。いわば在野の地理学者として、『帝都と近郊』（一九一八年）をはじめすぐれた業績を残した小田内通敏は、

東大出身者、文理科大出身者の多く、さらには文検合格者の山口弥一郎に、その著作を通じて、さらには直接に接することによって、広範な感化を及ぼした。水文学の吉村信吉は、その仕事と人柄によって、その仕事の後継者である山本莊毅のみでなく、文理科大、東大の若い研究者の高い尊敬を得ていたことがわかる。今村学郎については、その強い個性に対して否定的な発言をした人もあるが、日本のアカデミー地理学の形成と発展の過程において大きな影響力をもったことを否定することはできない。東大の佐々木彦一郎、山口貞雄、京大の室賀信夫については、いずれも病弱であったこととともに、地理学者としての彼らのすぐれた素質を、多くの人が語っている。戦後の日本の地理学界の体制的頂点の地位をしめることになった一人であるが、渡辺光は戦前段階から、若い指導者として重要な役割をはたしていたことがわかる。

当然話をお聞きしなければいけない人たちの発言がまだ漏れているし、逝去されたため貴重な発言をお聞きする機会を逸してしまった方も多い。したがって収録された発言から知ることのできた地理学者が形成された環境

は部分的、場合によっては一方的なものであることは認めなければならぬ。その一例として、これは村松繁樹によって岩手大学における集會において指摘されたことでもあるが、戦前の日本の地理学において高等商業学校や商科大学あるいはそれに類した大学で教鞭をとっていた地理学者が果たした役割が大きかったということである。商業地理あるいは経済地理を講じていた彼らは、地理学教室という制度的枠組みをもたず、他の学問分野の専門家のなかで地理学の存在理由を主張しなければならなかった。収録された発言のなかでは、織田武雄がそのような環境に言及しているだけであるが、経済地理学を講じるために、織田は一九三〇年代にすでにレッシユヤクリスタラーの著書に接していたのである。この種の人として、京都大学に赴任する前の石橋五郎、佐藤弘、小寺廉吉、村松繁樹、田中薫、松井勇、米倉二郎などの名前をあげることができよう。彼らの独自の学風は、若くしておかれた職場の環境にかなり拠っているといえるのではないだろうか。しかし、現在のところ、これは推論の域を越えるものではない。

(8) 西水孜郎氏には、出版社の企画によるインタビューを

お引きくださいたいが、一九八五年七月に逝去されたので、このインタビューはできなかった。西水氏の発言は、一九八三年四月千葉大学における研究集會でなされたものである。

(9) 京都帝国大学文科史学科に地理学講座が設けられたのは一九〇七年のことである。東京帝国大学では、理科大学地質学科に地理学の講座が置かれたのが一九一一年、理学部に地理学科が開設されたのが一九一九年である。

(10) 「地理学の制度化」という表現は、Cappel, H. *Institucionalización de la geografía y estrategias de la comunidad científica de los geógrafos* (I) (II) *Geo Critica* 1977, Institutionalization of Geography and Strategies of Change in Stodhart, D. R. (ed) *Geography, Ideology and Social Concern* Basil Blackwell 1981 において用いられている意味で用いる。

(11) 足利健亮「小牧実繁と歴史地理学」京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房一九八二年および竹内啓一・野沢秀樹「地理思想史における伝播・継承および革新——日本を主として（一九八四年度秋季学術大会シンポジウム）』『地理学評論』五八（シリーズA）——二、一九八五年を参照。

(12) 今回の小牧実繁、織田武雄へのインタビューでは、当初の申し合わせにより、地政学への言及はなされなかった。さきに本文で言及したように私としては、インタビューや

ディアローグにさいしてこのような申し出があらかじめあることをむしろ歓迎する。日本の地政学については、Takeuchi, K. *Geography and Geopolitics in Japan*, Reexamined *Hitoisubashi Journal of Social Studies* vol. 12 No. 1 1980 にせうご言及したことがある。

(13) Buttimer, A. op. cit. 1983

(14) 岡山俊雄「明治大学文学部地理学教室の歩み——文科専門部史学科・地理歴史科時代——」『駿台史学』第三十五号 一九七四年。

(15) 中川浩一「地理学の興隆と文検制度」『日本地理学会予稿集』一〇 一九七六年。

(16) 一例として、文検受験者用の受験雑誌『地理教育』誌において、地理学における数学的方法の有効性をめぐって展開された石田龍次郎、藤原咲平などの論争をあげることが出来る。論争の当事者はいずれも文検出題委員などではなかった。

(17) 足利健亮、前掲学会報告要旨 一九八五年。

(18) 第二次大戦後における地理学方法論に関する議論に大きな影響を与えた存在として飯塚浩二があるが、飯塚の議論の本質的な部分は、すでに一九三〇年代に発表されていたことをここに想起する必要がある。第二次大戦後の論者たちは、飯塚がどのような環境でそのようなものを発表したかということ、飯塚自身の言葉を鵜呑みにすることなく検討してみる必要があったのである。

(19) 学術会議会員(すなわち地理学研連委員長)、日本地理学会会長などの地位を意味する。

(20) Losch, A. *Die räumliche Ordnung der Wirtschaft* 1940, Christaller, W. *Die zentralen Orte in Süddeutschland* 1933
周知のようにこの二冊の書物は、第二次大戦後の地理学における計量革命に大きな影響を与えることになるが、一九三〇年代に、これらの著作の重要性に注目した地理学者は、世界でも非常に少数であった。

四

地理学者の夢として語られている内容は、大部分が極めてアカデミックなものである。実学としての地理学をはっきりとうたっているのは山口弥一郎など少数である。いかなる職にあっても、地理学の研究を志していたというのは、後になって正当化された部分があるとしても、かなりの真実が含まれているであろう。

今回のヴィデオ収録で対象とした人たちの世代の日本人の生活史をみるならば、戦争と敗戦とは誰にとっても大きな事件であった。今回の発言者も、あるいは空襲で両親を失い、あるいは自らが九死に一生の体験をしたりしている。戦中、戦後の激動期に、一名をのぞいた二一

名が職場を変えたり失職したりしている。ここでは、そのような生活史における激変よりも、戦争体験が日本の地理学にとってもった意味というものを考えてみよう。

召集されて、一兵卒として敗戦をむかえた人もいる。

また、勤労働員で授業はできなかったが、教師として敗戦をむかえた人も何人かはいる。しかし、地理学は帝国主義列強において軍事、植民地行政と密接に結びついていたのであったし、日本もその例外ではなかった。各個人のレベルで見れば、それは生きるためにしなければならなかったことであり、研究上の便宜がえられるという点でも必要なことであった。全体としてみれば、軍事および植民地行政に関与した人が非常に多かったのは東大の教官、占領地での施政官、満鉄調査部の職員、その他の参謀本部、陸軍気象部などに勤務した人たちもいる。

日本の植民地統治が、副産物としてではあれどだけの学術的成果をもたらしたかということに関しては、多くの資料が消滅してしまっていることもあって、その実態がよくわかっていないし、また、たとえば満鉄調査部の活動に対するように、その評価も人によって非常に異

なっている。しかし、軍あるいは植民地の調査機関で働いた個々の地理学者に関する限りでは、その経験が後の研究をより豊かなものにしたことが、今回の発言の内容からわかる。同時に、たとえば山本莊毅や上野福男のように、資料を、衣服に縫いこんだり腹にまきこんだりして、非常に苦勞して日本に持ち帰った人もいる。そこには、研究者としての壮絶なまでの意地がある。また、そのような形で戦時中に国外に出た人たちが、そろって、戦後、海外調査や外国での学会に数多く出席する、いわば国際派として活躍したのが注目される。今回の発言者のなかで、留学経験をもつのは一八九八年生まれの小牧実繁だけであり、年代的に言って、国外に出て国際感覚を養う機会は、軍あるいは植民地統治機構に参加するという形でしかえられなかったということができよう。軍や植民地統治機関はまた、当時、民間や国内の大学では考えられないような多くの資料、大きな資力と権限をもっていた。さらに、東南アジアではイギリスやオランダがのこした多くの調査・研究の成果にも接することができたのである。国内では、フィールド・ワーク中にスパイの嫌疑をかけられて警察や憲兵につかまった経験を多

くの地理学者が持ったのであるから、軍や植民地統治機関に属していたことは、調査の仕事をするという点で非常に恵まれた立場にあったことになる。

戦後、彼らはそれぞれ代価を支払うことになった。公職追放になった人もいるし、そうでなくても戦後しばらくの間は失業状態だった人が多い。戦死、あるいは調査中に行方不明になった仲間もいたのであるから、結果的にこの世代の地理学者が、それぞれ戦争の被害者であるという感覚をもったとしても、それは無理からぬことであつたとも言えよう。しかし、戦争中、軍や植民地統治機関にあつてした仕事の成果は、自然地理学の分野のものだけを別にすれば、わずかしか発表されていない。また日本の地理学者が、間接的にはあれ、日本帝国主義、あるいは日本軍国主義にコミットした経験を書いたものも非常にすくない。戦後の日本の社会、環境が、そのような文章を発表するのをひかえさせたのであろう。その点では、戦時中は、ひとつの悪夢であつたことになる。

仕事をしようとすれば、結果的には体制にコミットせざるをえなかつた時代に生きた人々を、後の世代の私たちが裁いたり糾弾することはできない。私たちにできる

こと、そしてしなければならぬことは、彼らの経験から学ぶことだけである。日本地政学については、その総括がまだなされていなくて以前に書いたことがあるが、⁽²¹⁾ここでは、それが、関連した地理学者に、大きな傷跡を残しているのが窺えたときか言うことができない。その地政学に対する最も透徹した批判者であり、ハウスホーファーの死を痛みをもつてうけとつていた飯塚浩二が、戦後二〇年を経た段階で、戦時中、東大教授として、関東軍にあらゆる便宜を提供してもらつておこなつた旅行の記録を発表したとき、私たちは二重の意味で啞然としたのであつた。⁽²²⁾ひとつは、苛酷な日程の旅のなかで、鋭い観察眼を失うことなく部厚い日記を書き続けた彼のエネルギーに対する驚嘆であり、もうひとつは、戦後二〇年を経た段階で、そのような旅行の性格に対するコメントないし反省がひとつも述べられていないことに対する違和感であつた。

今回の発言者の多くは飯塚とちがつて、戦争中のことについて、今まで殆んど書かなかつたという点で、状況に強いられたものであれ、ひとつのうしろめたさを感じていたのかもしれない。しかし、今回の発言に、私は、

かつて飯塚の文章が発表されたときにもったのと同じ二重の意味での感慨をもったのであった。だが、今回は、啞然とするだけですむものではないのである。地理学者の営為を内面から理解しようとするのであれば、そこで感じられる違和感は、直ちに、自分が現在している営為を根本的に点検する契機になるものでなければならぬ。自らの営為の制度的枠組み、そこで行使している権力の由来、性格に対するたえまのない自覚と反省とが要請されることになるのである。

(21) 竹内啓一「日本におけるゲオポリティックと地理学」『一橋論叢』第七十二巻第二号 一九七四年。

Takeuchi, K. op. cit. 1980

(22) 飯塚浩二『満蒙紀行』筑摩書房 一九七二年として一冊にまとめられているが、その大部分は一九六五年から一九六六年の間に『東京大学東洋文化研究所紀要』に発表されたものである。その一章は、一九五一年同紀要第四冊に発表されているが、ここで「啞然とした」というのは一九六五年のことである。

〔謝辞〕ここに発言を収録の対象にした方達のお名前をその生年とともに記し、収録に御協力下さったことに心から御礼の言葉を申しのべたい。（*印は古今書院の企画によるインタヴュー）浅香幸雄（一九一〇）伊藤郷平（一九〇六一—一九八五）、*上野福男（一九〇九）、岡山俊雄（一九〇三）織田武雄（一九〇七）*籠瀬良明（一九一一）神尾明正（一九一二）木内信蔵（一九一〇）岸本実（一九〇八）*幸田清喜（一九〇四）小牧実繁（一八九八）下村彦一（一九〇〇）、西水孜郎（一九〇四—一九八五）竹内常行（一九〇七）浜田清吉（一九〇六）福井英一郎（一九〇五）村松繁樹（一九〇五）、矢沢大二（一九一三）*矢嶋仁吉（一九〇七）山口弥一郎（一九〇二）、山本莊毅（一九一四）米倉二郎（一九〇九）。

〔附記〕本稿は昭和五十九年及び六十年年度文部省科学研究費補助金「総合研究」A『地理学思想における認識論的諸問題』（課題番号五九三八〇〇二）研究代表者 野沢秀樹）による研究成果の一部である。

（一橋大学教授）